聖霊降臨後第２３主日（全聖徒の日）

２０２６年１１月　１日

風のように　甘木教会



主任牧師：崔大凡　　牧会委嘱牧師：竹田孝一

「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。　　マタイによる福音書5:3

【説教要旨】

初めて教会に生き始めたとき、教会は「召天者記念礼拝」として、日本のお盆に合わせて８月に守っていたこともあったが、まだ教会も若く戦後に出来た教会はこういう習慣はなかった。いつの頃からか 11 月の「全聖徒の日」を教会全体で守るようになったのはまだ新しいと思う。

１９８３年、私がブラジルに着任したとき、「今日は大きなお祭りがありますから、お墓にいきましょう」と言われたことを思い出す。それが「ヒナードス Finados ドイツ語 Allerseelen 万霊節」だということが分かった。西洋のお盆であり、墓参りの日です。そうして、よくよく調べると 11 月１日は、「全聖徒の日 Dia de Todos os Santos（ドイツ語 Allerheiligen)」で、すべての聖人、殉教者を偲ぶ日から、天に召された信仰の先達を偲ぶ日となりました。天上にある見えない教会・信者と地上にある見える教会・信者がキリストの恵みの食卓を中心として共に集い、祝宴にあずかり、礼拝を守る記念となりました。「全聖徒の日 Dia de Todos os Santos（ドイツ語 Allerheiligen)」の日のもっとも近い日曜日に私たち日本の教会は全聖徒の日として礼拝を守るようになりました。今年の日曜日が 11 月 1 日 Dia de Todos os Santos となりました。大森教会の時代、11 月 1 日の前後に Finados、創立者・エルソン牧師、信徒らの墓参りをしていました。

私たちに信仰を通して、私たちの天井の住処は、「**神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとく拭い取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去った」（黙示録２１章）**

甲府教会の献堂を前にして、日本脳炎で、30歳で天に帰られたエルソン牧師の横浜外人墓地の墓前に立ちながらいつも先生働きの苦労の涙を拭い取ってくださっていると神さまに感謝しつつ、先生に感謝していました。また、教会初期に責任をとってくださった信徒さんに感謝しつつ共に歩みをしていました。

ルターの死について小田部進一先生が「ルターから今を考える」という本で詳しく書いています。

「薬をひとさじ飲んだルターは、再び。『私は倒れ、息絶えるであろう』と述べた後、急いで、詩篇31編6節『**まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください。**』をラテン語で三度繰り返し祈っている。その後、ルターの口は閉ざされ、目をつむったまま、反応が無くなった。そこで、ヨナスとコエリウスがルターに、『キリストの信仰において死に、その教えを堅く守りますか』と呼びかけたところ、その時だけは、はっきりとした声で返事が戻ってきた。『はい』」

ルターは、死においても「キリストのみ」、「恵みのみ」「聖書のみ」に立っていたのです。

「形式的な行為ではなく、他の聖句とともに、キリストにおいて死から解放と永遠の命を約束する神に対する深い信頼の表明であり、ルターの祈りとして理解出来る。・・死に臨む人が横たわる部屋を満たすのは、もはや教会的・宗教的儀礼ではなく、信仰者自身の神との祈りにおける関係性である。そして、その関係性は、神がその人に臨み、語る、救いの約束の言葉を受け入れる信仰によるものである。・・・・・・・ルターの安らかな死は、キリストの十字架を通してすべての嘆きや痛みを聞き届け、罪を赦し、永遠の命を約束された神への深い信頼に基づいていた。この『信仰のみ』による救いの確信が、ルターの安らかな死の根底にあることが示される・・・」

心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものであるとイエスさまは、私たちに語りかけ下さいます。「心の貧しい人々」を共同訳聖書は、「神のより頼む人々」と訳しています。「神のより頼む人」こそ幸いであり、「天の国はその人たちのものである。」のです。ルターの死は、まさに、「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」というイエスさまの御言葉によって、生かされたものです。

ルターの安らかな、良い死は、キリストの十字架を通してすべての嘆きや痛みを聞き届け、罪を赦し、永遠の命を約束された神への深い信頼に基づいていた。この『信仰のみ』による救いの確信が、ルターの安らかな死の根底にあり、私たちの死でもあります。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」とあるように先に天に召された者も、私たちもキリストに結びつけられ、一人一人が主に信頼して、豊かに実すなわち天国を自分ものとして与えられています。

今、ここに先に召された方々は、天の国はその人たちのものであるということが、イエスさまの信頼において、信仰において与えられています。

今、この地上を生きる私たちも、先に召された方々に倣って、キリストの十字架を通してすべての嘆きや痛みを聞き届け、罪を赦し、永遠の命を約束された神への深い信頼、信仰を生き、ルターのように良い死を迎えられる日を希望しつつ、「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」というみ言葉をいつも心に刻みこみつつ激変していく世界にあって希望をもって一歩一歩、踏み出しましょう歩みましょう。



牧師室の小窓からのぞいてみると



じわじわっと世界が根本的に変わりつつあることを肌で、ますます感じるようになっている。いままでの価値観が崩壊し、新しい価値観が生まれそうだが、それが何なのかまったく皆目がつかない。時代がかわるということはそういうことかと思うようになってきた。だからこそ、私はどこに立つかというかが私たちは問われているのではないだろうか。
凄い時代を生きている私たちは将来なんと言われるだろうか。

園長・瞑想？迷走記。



私の好きな園舎は、神水幼稚園で、アメリカのルーテル教会の支援をうけて、モード・パウラスト宣教師、松田百代先生が育てた幼稚園である。創立当時の本館を改修し、「松田先生メモリアルコーナー設置」されている。



パウラス先生とは、別府時代、一度、お会いした。礼拝堂で何時間も感じられるほど頭を下げ、祈られていた印象が強烈に残り、信仰者の模範を見た。私のこれまでの信仰の背骨を支え、幼児教育への姿勢を形作ってくれている。「朝まだ早き祈りのときに慈愛園に、イエスさまがお入りになる。昨日まで周到に用意した計画をこのとき一瞬に壊される」との言葉は、幼稚園の園長となって、毎朝、繰り返し唱える言葉である。

日本にあるルーテル教会の幼稚園、保育園、福祉施設は、多くの天に帰られた人々によって今日があると思う。全聖徒の日を迎える今日、もっと先人を知り、謙虚、この方々に頭を下げるべきではないだろうか。

日毎の糧



聖書：わたしの魂は主を賛美する。貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。　　詩篇３４：３（新共同訳）

ルターの言葉から



「わたしは恐れずに眠りますと
ルターの娘レーニッヒェンは言う
彼女はここに横たわっている
わたしはここに小さなベットに休んでいます。
永遠にわたしは失われたままでいるはずでした
なぜなら、私は罪の中に生まれたからです
しかし、いま、わたしは生きています　　そして幸福です
なぜならキリストが
その血汐をもってわたしを贖ってくださったからです

（『目でみるルターの生涯』　M. クレーベルク、G. レンメ　森優訳　聖文舎）

この詩編は、信仰の教育的目的をもって知恵を詠ったものと思われる。「アルファベットによる詩」ということで分かる。その教育の対象は、「貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。」とあるように、「貧しい人」であった。

聖書にとって、「貧しい人」は、大切な言葉である。イエスさまの山上の垂訓おいて、「貧しい人は幸いである。」と言われる。マタイは、「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。5:3」、ルカは、「貧しい人々は、幸いである6：20」と。この詩のもう一つの大切な言葉は、「畏れる人」という言葉である。「貧しい人」にしても「畏れる人」にしても、主に打ち砕かれた者こそ救いがあるということである。ルターは娘の墓に主に打ち砕かれた者の幸いをしっかりと証しする。「幸福です。なぜならキリストがその血汐をもってわたしを贖ってくださったからです」

祈り：打ち砕かれた心を持ち続けられますように。アーメン。

甘木通信



神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていな。　　コヘレト３章１１節

一人の宣教師のお墓

母国・フィンランド・ミッションを頼って 1950 年秋にアメリカから日本に来て、1951 年に東京・大森で宣教を始めたアメリカ・フィンランド移民の青年宣教師がいた。大森ルーテル教会を創立し、同時に 1953 年（昭和 28 年）に甲府で宣教を始められ、東京と甲府の間を行き来していたが、宣教師館を買い求め、1955 年（昭和 30 年）に教会堂を建築した。1955 年猛暑の甲府にあって、お疲れになったのか、日本脳炎に罹り、体調を崩され、病院へ行かれ、さらに東京の病院に移られ、9 月 13 日に召天された。30 歳。献堂式を見ずに召天した。甲府教会、大森教会で葬儀が行われた。

「よくよくあなたがたに言っておく。**一粒の麦**が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」

私はこの人と 15 年間付き合った。正確にいけば、春、秋の年 2 回の横浜外人墓地に墓参りをするたびにこの人と会っていた。（エルソン牧師葬儀）☞





そして、今年、彼に導かれキリストに出合い救われたＹさんが天に帰られた。**何事にも時があり、死ぬとき**とあるが、しかし、青年宣教師をＹさんの尊敬する心は深いものがあった。なぜ、この宣教師とＹさんを神は若い時に早く別れさせたのかと。彼らの日々になさった一つ一つの神の業は今も私は測りがたい謎で、見極め難い。

（甘木日記）土）甘木教会、明日の宗教改革記念日の記念日礼拝の準備。台風が気になる。**日**）宗教改革記念の礼拝、午後から祝会。楽しい時間。**月**）唐津で研修。何から手を付けたらよいか混乱している。**火**）研修最終日。終わり唐津教会礼拝で説教。ここは私をここに立たせてくれている恩師、二人の教会。緊張。**水**）頭が疲れている。**木**）松崎保育園でルターの紋章をつかって宗教改革の意味を一緒に職員、子どもらと考える。**金**）一緒にかって伝道した牧師さん夫妻と夕食をいっしょにする。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。はぐちらない聖人（牧師）もいますが。



土）朝から甘木教会へ向かう。運転している横で家内が横でうたた寝をしている。よくも一緒に歩んで来てくれたとふと思った。昨日までルター、宗教改革クッキーを焼き、袋詰めしていた。今もよく気が付き、働くが、横で寝顔みながら、よくここまで来てくれたと感謝と惜別が近づいているゆえ二人が歩む時間に愛おしさが湧いてくる。到着。私は園庭の整備、家内は明日のブラジル式の焼き肉の用意、奏楽の練習。日）台風でみんなの足が心配であったが、さほどの影響なく一安心。宗教改革記念礼拝。500 年以上たってもルターからメッセージがある。真理＝愛、神の愛に立った一人の人が世界を動かした。今の混沌の時代だからこそここに立つことだと思う。午後からお祝いのブラジル式焼肉をゆっくりと食べて、時間を過ごす。こういうゆっくりは必要だと思う。家内が作ったルター、その紋章のクッキーをプレゼント。月）全国幼稚園設置者・園長会研修に唐津に行く。今はどの世界でも劇的変化の時代である。幼稚園もまたこの世界の中に立たされている。緊張した良き学びとなる。同時に柴田愛子が、「愛子さんの　なんか変だな？（暮らしの手帳)」で言うように「大人も子どもも『変』を持ち続けてほしいです。思い続けていれば、なにが『変』なのか分かってきます。分かると、それを変えようとする力が湧いてくる。」という言葉が湧いてくる。私たちの夫婦のために誕生日プレゼントに用意くださったホテルでゆっくりと。火）朝、ホテルの横の鳴門部屋稽古場の相撲を見て研修へ。研修も終わり唐津教会の礼拝で説教。ここは私を牧師として育ててくださった恩師二人の教会。説教が終わりお二人の恩に少しでも報いたよう安堵感が湧いてきた。コロナ以降、初めて超距離の運転で腰が痛くなる。ひやひやの運転。水）頭が回らない上に、寒い。久しぶりに日善幼稚園の礼拝を担当する。時は流れ、正月は近いことを告げるつやぶきの花が咲いている。木）松崎保育園で宗教改革の子ども礼拝、聖書の学びをする。礼拝家内が作ったルター家の紋章のクッキーを園児にプレゼント。私は切り絵を。甘木に来るとＫさんが砂場を整えていてくださる。心から感謝。金）一緒に若い時に伝道に励み、歩んだ今年引退されたＡ牧師夫妻と会食。

